朝鮮植民地支配下での日本の桜・花見の伝播と受容過程

朴　俊浩

はじめに

今日の韓国では春になると、多くの所で桜が咲き、花見が行われている。このように自然を楽しむことは、人類の普遍的文化といえるが、「花見」を「花（おもに桜）を見てあそびたのしむこと[1]」に限定してみると、韓国では花見という文化は日本の植民地支配以前からあったものではないのではないか。

これまでの植民地期朝鮮における花見についての研究は、韓国を中心に社会学、造景学、民俗学、歴史学といった分野から花見が行われる場所の空間的性格や桜・花見という文化に関する研究が行われた。例えば、昌慶苑が内外に対して朝鮮の文明を誇示する役割など文化政策としての活用を述べた徐泰貞(2016)[2]、純宗のための御苑でありながら大衆のための近代的空間の昌慶苑と夜桜を述べた金庭恩(2015)[3]の研究がある。 また、近代的、都会的、日本的な趣味としての昌慶苑の花見を取り上げた朴昭賢(2004)[4]、官制のスペクタクル文化を用いて朝鮮人を脱政治化させる手段として取り上げた金炫淑(2008)[5]、朝鮮総督府の支援の下で桜が増加し、一定空間の中で花見が消費される慰安空間を論じた金海慶(2011)[6]、花見が朝鮮にもあった春の花を楽しむ従来の文化を背景に朝鮮人にも徐々に受容されたとした金庭恩(2014)[7]、 花見が行われる場所の便宜性を中心に変化したことに関する姜榮祚(2016)[8]などがある。金東明(2018)[9]は、平野健一郎[10]の文化触変の過程から朝鮮における花見は日本の植民地支配という状況のなかで強制されたものではなく、朝鮮人による選択的受容によるものであるとしている。これらの研究は、桜や花見が日朝修好条規(1876 年 2 月 26 日)の締結から植民地支配期にかけて一般化したという点では認識をともにする。

ここで参考になるのは高木博志の研究(2011)[11]である。近代化以降の軍国主義に伴い桜の意味の変質を論じた大貫恵美子(2003)[12]があるが、高木は桜のなかでもメイヨシノ種に注目した。歴史的にみると従来、日本で愛でられたのはソメイヨシノではなかったが[13]、近代になりソメイヨシノが堤防や軍隊・学校・郊外住宅地と結びついて広がり、それと同様な現象が朝鮮においても起き、日本の文化として学校教育や観光言説とともに一般化していったのではないかと高木は論じている。なお、かつて大日本帝国海軍の軍港があった韓国の「鎮海」の桜を朝鮮と日本との歴史からたどった竹国友康(1999)[14]では、解放後の韓国社会の桜を巡る植民地期との断絶の試みが論じられた。 韓国が日本植民地支配の残滓であることで桜を切り倒した後、しばらく空虚感を感じるが、ソメイヨシノが済州島の桜を元にしたという研究が世間に広まったことや、観光振興の政策(1976)とし改めて植樹されたため、解放後の桜は植民地とは関係のないものと思うようになったという。このよう

な断絶の試みは、金東明の続編(2019)[15]で昌慶宮復元事業に伴う桜の行方や汝矣島の花見が韓国社会に定着する過程を追って、「韓国式花見」を主張したことと相通ずる。

では、現在ヨメイヨシノに象徴される桜と花見という文化・習慣はかつて朝鮮ではどのようなものだったのか、またそれがどのように受容されたのか。本稿は主に日朝修好条規から日中戦争(1937年勃発)以前までの期間を取り上げ、それ以前の期間と比較する形で、植民地朝鮮における桜の植樹や花見の伝播とその受容について、朝鮮人生活者という視座から考察する。日本の朝鮮支配ということで、本来ならば朝鮮半島全体を対象とすべきであるが、今回は主にその支配が端的な形で表れていた京城を中心に取り上げることを先に断っておく。

1.　植民地支配以前の桜

朝鮮には、「賞花」という春に咲いた花を鑑賞する文化があったことが確認されている。しかし、鑑賞される花の対象は、「陰暦二月末、三月初旬から咲きはじめる梅花、躑躅、三月中旬まで桃花、スモモの花[16]」である。植民地支配期以前に朝鮮人が執筆した桜に関する叙述は殆ど見つからず、その多くは日朝修好条規以降に日本人が執筆したものである。このことからみても、桜に対する注目度が日本人と朝鮮人では違っていることがうかがえる。

(1) 牛耳洞の桜

①　洪良浩と桜

「朝鮮では珍しい桜の名所[17]」とされた「牛耳洞」は、桜が花崗岩の多い所でよく成長するということから、北漢山の脈が繋がっているという理由で選ばれたという[18]。日本人によって植民地支配以前から桜が見掛けられた[19]場所として記されている。その起源について、学者で政治家でもあった洪良浩(生没：1724-1802)が日本に赴いた朝鮮通信使に依頼した桜の苗を自分の別荘のある牛耳洞に植樹したとされているものが多い[20]。従って、牛耳洞の桜に関する多くの研究では、「洪良浩説」が用いられている。しかし、植樹された規模について吉野数百本[21]、数万本[22]と史料ごとに異なることを含め不明な所も多く、竹国(1999)[23]も触れたように、「洪良浩説」への反論もある。

牛耳洞の桜に対するもう一つの説は、第17代朝鮮王・孝宗(生没：1619-1659、在位：1649-1659)が北伐を計画するさいに弓材に使用するため植樹したものであるということである。既に植民地期においても、洪良浩説に対して「洪良浩が朝鮮通信使･趙曮に依頼した苗木から始まったというのは、文集中からは見られず、信憑性が低いとする説である[24]」と反論されている。更に、洪良浩とその一族が残した記録に「桜」が見当たらないことからみても、その関連性が疑われる。洪良浩は、政治的な理由で自ら行動を控えてから別荘のある牛耳洞に「兼山楼」と「小帰堂」を建てて、死亡する一年間前から暮らし、『暮春出耳渓途吟』など牛耳洞の風景を詠んだ詩には、「小雨春明野…萬柳與眉齊…桃花

千樹裏[25]」といい、桜は触れていない。自分が深く関与し、植樹した桜が別荘に数百本、数万本規模で咲いているならば、牛耳洞の春を詠うさいに言及するはずであろう。また、彼の孫·敬謨（文官、生没：1774-1851）は、花や岩などで造園に興味深く、牛耳洞に関する記録も残しているが、そこからツツジ、菊は見られるが、桜には触れていない。

以下では、朝鮮人が桜をどの様に認識していたかを考察するため、牛耳洞の桜の朝鮮在来種に触れてみる。1920年代から1930年代初頭にかける牛耳洞の桜は「吉野櫻と異つて純粋な朝鮮櫻[26]」、「此の地に自生の山櫻[27]」であり、吉野桜[28]、大和桜[29]という桜は、1930年代後半になると「今や之等の移植した櫻樹は殆ど枯死の狀態[30]」になったという。しかし、これらの言説は、洪良浩説を前提にしたものであることに注意が必要である。牛耳洞が「古くから櫻の名所[31]」と言われ、1910年半ば頃には多くの人が寄せるようになったが、元来疎らに咲く朝鮮在来の山桜があったと考えられる。何故なら、牛耳洞は「北漢山の峻峰と水清き溪谷に混つて山櫻の亂れ咲く[32]」所であり、牛耳洞の桜の真の趣は中心地である天道教鳳凰脚の「左側の溪谷の間に入ると小川の際に櫻[33]」としたからである。

② 実用品製作のための桜とその衰退

但し、牛耳洞の桜が軍器寺[34]で弓を作る木材として、桜の植樹する者には各種の税金を免除する政策を施すなど人為的に植樹されたうえ、無断伐採を厳禁したため[35]、植栽規模が拡大できた。しかし、小銃や大砲など武器の発展に伴い弓の生産が低迷するなど、軍事的目的を失った次第に国による保護・監視が緩くなったことで、盛衰をたどった。のち、三千本の桜が改めて植えられたが、一本も残されず、大量の実が得られる栗の木に植え替えられたという[36]。しかし、1600年代半ばから1700年代後半の間に繁栄期を迎え、消えた牛耳洞の桜がどのような過程を経て1910年代頃から桜の名所と呼ばれるほどになったのかは資料が見つからず、不明である。以上検討したように、牛耳洞の桜から朝鮮在来種の桜の存在の可能性が考えられる。

(2) 植民地支配期以前の京城・南山における桜

植民地期に行われた朝鮮植物調査をまとめた『朝鮮植物名彙』の桜桃科（サクラ科）の中では、ケイジヤウウハミヅザクラ、ヒメヤマザクラ、ビラウドヤマザクラという京城を代表産地とする朝鮮特産種が出ている[37]。牛耳洞は、今日（ソウル市江北区）とは異なり、当時は「京畿道高陽郡崇仁面[38]」であるため、ここでいう京城とは「南山」を指す可能性がある。南山は、保護官が配置され「樹木の伐採を嚴禁[39]」したため、鬱蒼たる美観を呈する[40]「魅力的な散策路を提供する[41]」所であった。日本人によって作成された南山に関する複数の記録からも以下の二つが確認される。第一に、「古來京城四周の山岳中に於て松樹の最も鬱蒼たる…其の間點々として野生の一重櫻が…現に藥水谷·臥龍祠及老人亭紅葉亭附近には櫻の古木を見ることを得、從來往時は京城に櫻なしとの傳説を反證する[42]」と南山に桜が松の間に点々と存在したことである。しかし、「南山が南山たる所は花よりも

鬱蒼な松林であり、松林よりはその山全体の姿態と線美[43]」という記述から桜が目立つ程ではなかっただろう。第二に、興謝野寛が「京城南山に櫻花多し韓人そを愛でざるは好尚の異なるによるなるべし。故里のやまとに似たる花は咲けど大宮人に歌なかりけり」と詠じたこと(1885)から、朝鮮人は南山の桜に大きな興味を持たなかったことが分かる。

2.　日本人の登場と桜

(1) 日本居留民と桜

以上検討した通り、朝鮮にも桜が確認されるが、どこでも見られるような花ではなく、鑑賞の対象でもなかった。これが一転する契機となったのが日朝修好条規を機に明治政府の奨励のもと、朝鮮半島に移住した日本人たちが「故國の春を思ふにつけても朝鮮に櫻のないことを寂しく感じ[44]」、桜の植樹を始めてからのことである。しかし、このようなノスタルジア的な理由のみならず、日本人にとって桜が「古くより我が國民性の象徴として愛護尊重せられたる我が國特有の名花[45]」として、「櫻花のある處必ず日本人の勇氣を増す、櫻花の繁殖は將さに日本人の繁殖意味する[46]」とし、日本人の朝鮮移住とともに桜を移植する必要を唱えた理由もみられる。要するに、支配地に対する「マーキング[47]」として植樹されたことがうかがえる。当初の日本居留民による桜の植樹は、旧日本領事館通り壽町倭城台交番所前の間に点々と散在した場所、領事館の附近[48]、泥峴などの日本人居留地に限られた。京城には、朝鮮人の「鍾路」と日本居留民の「泥峴」が重なり合う「二重構造[49]」が形成されていたうえ、「朝鮮総督府京畿道告示第 7 号[50]」により居住区も分けられていた[51]。このような事実の他に、民族的感情の対立もあり、朝鮮人が生活圏内で桜に接する機会は少なかったとみられる。

(2) 植民地朝鮮に設けられた公園と桜

では、朝鮮人はどのような契機で桜に接したのか。それは公園である。以下では日本が京城に設けた南山公園、昌慶苑のなかに植樹した桜の意味について考察したい。

①　日本における公園の意味とその朝鮮への設置

日本による朝鮮への公園設置の特徴と意味を考えるため、まず日本における公園とは何かをみてみる。明治維新の後、岩倉使節団が欧米諸国の制度や文物を調査したさいに、使節団は公共の空間としての公園が近代社会で果たす政策的役割に注目した。特にパリのビットショウモン苑、バーデブロン苑から影響を受けて[52]、太政官布達第 16 号(1873)により初めて公園が取り上げられた。

日本の公園は、庶民が集まって楽しむ場としての機能を持つ一方、近代性を装う上からの制度であり、「日本の公園の『公』には、『官』の意味合いが色濃くある[53]」と歴史学者・田中彰は指摘している。

朝鮮ではどうだろうか。日朝修好条規以降から第二次日韓協約(1905 年 11 月 17 日)による保護国期(1905-1910)には、日本公使館などの協力の下で日本居留民によって、いくつかの公園が設けられていた。韓国併合(1910 年 8 月 29 日)の以降には、「朝鮮を、更に物質的文明の域に導き、今日以上の進歩發展を遂げしめ、その民衆の福祉を増進せしめ、文化の惠澤に浴せしむることは、聖旨を奉體する我が日本國民の責務[54]」として、主に官主導で公園が設置された。以下では、個々の公園から韓国併合を前後して、日本が造った公園の主体や目的を考察してみたい。

② 倭城台公園：追悼施設の中の桜

壬午事変(1882)によって南山の近くに移転した日本公使館を中心に「茶屋、劇場をはじめ日本人の福利に不可欠なさまざまな施設[55]」が設けられた。そして、居留民が公園設置を求めたことにより、公使と京城府尹との間で協議を行い、朝鮮政府から敷地が永久賃付されたことによって公園が設置(1897)された。長い時間を要したこの協議(1882-1897)を終了させたのは、日清戦争(1894-1895)である。これを機に朝鮮における日本の影響力が清国を上回り、朝鮮側は日本側の要求に応じざるを得なかったとみられる。このような力関係の変化によって設置された公園が日本の朝鮮支配の縁の地として認識される「倭城台」であることも、この公園を理解することにおいて重要である。

「倭城台」の地名は、16 世紀後半に豊臣秀吉が全国統一後、二度にわたって行った朝鮮出兵(文禄･慶長の役、1592-1598)で、増田長盛が率いる部隊[56]が鑄字洞に陣して兵站を掌り日本軍が此所に築城したことに由来する[57]。朝鮮征服というかつての試みは失敗に終わったが、そうした朝鮮支配の意識は 1880 年に京城に公使館を設置するに、「文禄慶長役以來永く其の影を絶つた日本人は、公使以下館員一行とともに旭日旗を掲げ始めて居を京城に構ふるに至った[58]」といった所感にも表れている。では、倭城台公園には、設立過程からみられる朝鮮をめぐる東アジアの力関係の変化、日本の朝鮮支配の歴史的由来のほか、その施設からは何がうかがえるだろうか。

この倭城台公園で「此の公園と称するは、今の甲午記念碑を中心とする約一町四方の小地域であつた[59]」と述べられていたように、「甲午記念碑」(1899)がこの公園の中心的な役割を担っていた。甲午記念碑とは、日本居留民のなか「午甲申の兩亂に遭難せる人々の霊」と「明治 29 年楊花鎮に仮葬せし日清役中成歓･中和等に於ける戰没者の遺骨」を官民の兩者の理解のもとで合祀したものである[60]。そして、皇太子･嘉仁の大韓帝国の訪問 3 日目(1907 年 10 月 18 日)に際して同道した有栖川宮威仁親王が「皇太子を誘ひ、徒歩にて、倭城臺公園に赴かせられ、甲午記念碑附近を巡覽[61]」した。同書の「日本居留民側の歡迎準備」によると、皇太子の通行ルートに合わせて道路や施設の整備･清潔の注意、各種工事からの安全確保、アーチなどの装飾の設置などの諸工事とともに、「南山公園内に御休憩所を建設して盆栽古器物類を陳列して御慰に供する事[62]」も行われた。この公園を設置するさいに日本居留民が「櫻樹六百餘本[63]」を植樹したとはいえ、訪問時期は 10 月

である。従って、甲午記念碑以外にまともな施設がなかったこの公園に、のち大正天皇となる皇太子の「御慰」が計画されたのは、日本の帝国化に犠牲となった日本人の追悼の意味に加えて、天皇の行幸地を聖蹟として特別視[64]させようとする目的がうかがえる。

そして、当初は京城居留民団により「各官庁に通知し、多数の参來を希望する[65]」規模で行われた倭城台公園における「招魂祭」が韓国併合に伴い、京城府が管轄・主催する行事になってから[66]、「総督、政務総監、軍司令官、師団長、警務総長、各部局、李王職、京畿道の各長官、赤十字社員、愛国夫人会員、高職員、有志者其他官民多数の参拝があるはずであり、且軍隊各部隊、在郷軍人、警察官、公立小学校、公立普通学校、公立高等女学校、記念幼稚園其他各学校職員生徒は各団体又は団体を代表し順次列拝し、且主催者は可成府民一般の参拝を希望[67]」するまでに拡大される。要するに、朝鮮人にも朝鮮支配に到るまでに犠牲となった日本人に追悼を捧げるように促す公的儀式になったことはこの公園の性格をより明らかにしていると思われる。

③　漢陽公園

倭城台公園が日清･日露戦争を機に増加する日本居留民に対応しきれなかったため、新しい公園の造園が推進されたが[68]、実は英･米国人がこの地域を占有するため、大韓帝国政府の要職者に接近したことへの対抗措置でもあった。日本居留民が「日韓人の共同公園を建設するといふ名目[69]」を掲げて有志を募り、趙重應や宋秉畯らの大韓帝国政府の要職者に接近した結果[70]、倭城台公園の西隣の南山北面一帯約 30 万坪の永久貸付の許可が得られる「所期の目的を達し[71]」、1908 年春に起工した。「漢陽公園」という名は趙重應の奏上で李太王が与えたもので[72]、開園式(1910 年 5 月 29 日)には、李太王の敕使･徐兼協の祝辞を賜り[73]、麦酒数箱やサイダーまで送られた[74]。大韓帝国政府がこの公園に関心を寄せていたことがうかがえる。では、「日韓人の共同公園」という当初の目標は、どのように実現されたか。漢陽公園の朝鮮人の利用状況は明確ではないが、宗学師が宗学生に暮春の日曜日に漢陽公園への行楽を誘う[75]など、朝鮮人が漢陽公園に訪れていたことが確認される。

しかし、公園運営にまつわる財政的問題で、運営主体が変更されるなど紆余曲折もあったが、程なくして漢陽公園が朝鮮神宮の奉建地に選定されたことによって、当初の目標は見失われる。『朝鮮神宮造營誌[76]』によると、「倭城台、奬忠壇孝昌園、社稷壇、三清洞、北岳山麓、神武門外等數ヶ所ヲ拾フテ候補地ニ擧ゲ」られたが、地勢、森林、風光、「社殿ノ布置ニ適セザルカ」「参道ノ開通ニ便ナラザル」等の検討の上の選定であるという。注目に値するのは、大韓帝国側が建てて、高宗から「御染筆[77]」を賜った青鶴亭、黄鳥亭、展観亭という「朝鮮式客舎」が撤去を余儀なくされたことである。「日韓人の共同公園」を唱えたこの公園の主体は、あくまでも日本側であったことを示唆している。

④　公園施設としての「桜」と奨忠壇公園

南山公園に注目したいのは、施設として「音楽堂、忠魂碑、廣場、池、亭、腰掛、電燈、噴水、廻遊及散策道路、雑木、共同便所、其他[78]」とともに「櫻」が樹木のなかで唯一の公園の施設としての記載されていることである。「南山公園」というのは、上記の倭城台公園と漢陽公園、自然状態の南山を総括して称している。これらの公園において樹木の中で桜だけが「施設」として挙げられていたのは、「奨忠壇公園」や「パゴダ公園」でも見られており[79]、桜＝ソメイヨシノが樹木のなかでも特別な存在であったことを窺わせる。特に、奨忠壇公園(1919)は、大韓帝国の建国過程での犠牲者を追悼するため造られた「奨忠壇」がそのもとである。のち奨忠壇公園は、飲酒や歌舞が楽しめる花見の名所の一つになり、更にこの地を見下ろせる場所には初代韓国統監・伊藤博文の菩提を弔う「博文寺」(1932)が建てられる[80]。植民地朝鮮における公園が単に「近代的空間」でなく、支配－被支配者の構図を企てたことが分かる。

(3) 朝鮮昌慶苑の上野恩賜公園化

①　昌慶苑の背景と恩賜公園としての機能

1907年王位に就いた純宗を慰める設備が必要ではないかという宮内府大臣李允用の問いかけに対し、当時大韓帝国宮内府次官小宮三保松が離宮[81]の昌慶宮に動物園と植物園が設けることを提案し、純宗は「大なる満足で之を容れられ[82]」た。宮中には、喜んでいた官吏もいる一方、宮苑の一部を民衆のために開放するだけではなく、博物館として歴代の王朝に由緒ある宮殿の建物に仏像から死骸を収めた棺槨(ママ)まで陳列し、土足のままで一般の入場を許容することが「忍びぬ處」であると反対した官吏もいた[83]。小宮が博物館の展示が学術研究や内外に朝鮮古代の文化を内外に知らせる価値を取り上げながら、頑固に反対する彼らを説得したが、「古例によつても明君は民と諧[84]に楽む、諧楽の二字を能く玩味せば、宮苑を庶民に開放する事の真意は判るだらう汝等未だ頑固な夢が醒めぬか[85]」と叱った純宗によって反対が抑えられた。

純宗の言辞からみると、「宮廷としての尊嚴を保たしめ王者の恩惠を庶民に垂れねばならぬ[86]」と昌慶苑を一般公開し、娯楽と文化的趣味を与えたことの目的を明かすうえ、「王室の觀は一變し宮廷の風紀は殆んど面目を改め、王室の尊榮と平和は益々宣揚せられ[87]」ると昌慶苑の一般公開の反対意見を顧慮する一方、「王殿下の賜として市民は正に感謝せねばならぬ[88]」といい、日本の恩賜公園との類似性がみられる。純宗は巡幸などのことからみても、伊藤博文など日本人重鎮の意見に逆らうことが殆どできない状態に置かれていたため、この言辞にも日本側の意思が多く反映されたと考えられる。

②　恩賜公園と権力の移動

日本において恩賜公園とは、皇室所有の不動産の一部を下賜し、国民に対して、「恩賜」という意識を与えることによって、天皇や皇室への親近感を高めるために設けられた

もので、芝離宮公園、浜離宮公園、井の頭公園、猿江公園、上野公園[89]がある。では、植民地支配における昌慶苑には、日本の恩賜公園とどのような類似性を持ち、その上にどのような要素が加えられたのか。昌慶苑の李王家博物館と上野恩賜公園の博物館との類似性に着目した李成市の研究を踏まえて考察したい。

まず、注目したいのは、「権力の移動」を示した上野恩賜公園の機能が昌慶苑にもみられることである。上野恩賜公園の敷地には、寛永寺という徳川幕府の将軍の菩提寺があったが、1868 年彰義隊と官軍との戦い(上野戦争)の過程で兵火により灰燼に帰した。徳川の権力を示す府下の第一での宏壮な堂や閣[90]である寛永寺は、1873 年 3 月 25 日に東京府の公園施設法によって公園化が決定されたのである。このような歴史を踏まえてみると、上野公園は明治維新以降、版籍奉還など政治と権力の中心が「天皇」に代わるさいに権力移動を人びとに見せつける場所である。なお、1876 年開園式を含め「三十有六回の多さに亘る行幸の恩澤を浴し、海内廣しと云へども其の比を見ざる聖蹟として、洵に光輝ある地[91]」とされていることからみても、権力の移動の示威機能はより著しい。このような権力移動の見せつけが朝鮮の昌慶苑においてはどのように繰り返されたのだろうか。 李成市によると、上野恩賜公園に博物館や動物園を設けることはかつての権力者である徳川の空間の聖性の剥奪し、無化したように、朝鮮の昌慶苑でも同様の手法で朝鮮王朝の聖なる空間を大日本帝国に編入させ、植民地統治のイデオロギー装置として機能したという[92]。

③　朝鮮支配における王室の活用

では、植民地朝鮮にはどのようは機能が加えられたのか。伊藤博文が当時の東洋最大規模の[93]植物園、動物園を昌慶苑に作ったのは、日本が朝鮮の近代化を施行する能力があることを内外に対して誇示するためであろう。明治時代に植物園、動物園、博物館といったものは、欧米の近代的施設として認識されていた点[94]、開園式には内外の官員が招待された点からも分かる。

もう一つ、朝鮮の王室の持つ権威と支配者である日本の持つ権力が相違する矛盾状態で朝鮮王室の権威を活用した側面もみられる。植民地朝鮮では、王室は君主の称号や地位を格下げされたものの「世界何レノ國ト雖主権ヲ有セサル者カ王位ヲ歴世ニ繼承スルノ例ナキ[95]」朝鮮の王室が維持された。それは、韓国併合がクーデターのようなやり方で実権を奪い[96]、大韓帝国の皇帝が統治権を譲与し、天皇がこれを受諾する形式的合意を装った「任意的併合[97]」という奇妙な形態をとったため、朝鮮人の人心を収攬し、抗日的姿勢の朝鮮人を懐柔するためには、朝鮮王室が必要であった。反日運動が広範に展開するなか、朝鮮王室を活用することが逆効果になることもあったが[98]、伊藤博文らの朝鮮統治の政策決定者は、近代文明を進める一方、忠君愛国的な国王観を持つ義兵や民衆の心を収攬するため、朝鮮王室の権威を利用した[99]。要するに、純宗を一般公開の政策決定者として表に出して、昌慶宮を破壊・改造[100]することによって、権力が日本に移動したことを見せつけたのである。更に、日本人のアイデンティティを象徴する「染井吉野凡そ 1400 本から

1500 本を日本から持ち込んで植え[101]」たのは、より権力の移動の意味を著しく表す行為でもあった。

3.　植民地朝鮮における桜・花見

(1) 日本と朝鮮における花見の様子の相違

①　朝鮮人の花見様子

以上、朝鮮における公園の設置が、倭城台公園や昌慶苑の例から植民地支配以前には追悼施設化、恩賜公園化したことを考察した。では、朝鮮人はどのような態度で「花見」をしたのだろうか。前述のとおり、奨忠壇公園は飲酒が可能であり、運動会などで夜まで賑やかで[102]、食べて飲んで遊ぶ「餞春客[103]」もみられた。一方、昌慶苑はかつて宮殿であるせいか、飲酒を含め、風紀を乱す行為は禁じられており、女性や子供が 6 割に達し、家族連れも多かったという[104]。公園の性格によって集客層や花見の様子を異にしたことがうかがえる。多くの朝鮮人が「朝鮮服[105]」を着て花見をしたというが、花見はモダンボーイやモダンガールの恋愛場所でもあり[106]、後述するが彼らの近代化した外形は、朝鮮服を着た人々にとっては、見物でもあった。では、朝鮮において、花見弁当などに代表される光景はあったのだろうか。以下の昌慶苑での花見を表現した［図 1］をみてみよう。

図 1　昌慶苑の花見

（出所）崔永秀（1939）『昌慶苑夜櫻漫畫點描 ： 漫畫』朝鮮日報社出版部。

朝鮮服を着ている男女が桜の下で「正座」をして弁当や酒を楽しむ男性を羨ましがっている対照的な様子を描いている。茶道[107]、剣道が学校教育に用いられ、朝鮮人も日本人らしい作法を身に付けるようになっていたから、正座している姿だけでは、民籍など正確な情報を見出すことはできない。しかし、昌慶苑で桜の木の下で場所を取り、密かに飲酒したのは着物を着て下駄を履いた日本人である[108]ということや朝鮮人の花見は桜並木のなかを素通りするという表現が多く見受けられていることから、日本人である可能性が高く、朝鮮人の花見様子と日本人の花見の様子が異なるということは推測できる。

また、朝鮮人の花見の対象は、桜とは言えず、昌慶苑の人波のなかで起きる事件や宴会場、近代化した建物などに多くの関心が寄せられており、モダンボーイやモダンガールもその対象であった。先の両者は1920年代から30年代にかけて京城に登場した消費社会の主体であり、贅沢や堕落した人間という否定的なイメージをもちつつ、「近代性」を持つ者でもあったことからみると、花見は、普段は接することのない「近代」の楽しめる非日常的契機や空間だったともいえる。

② 現代韓国社会の花見の様子からの推定

では、視座を変えて、解放後(戦後)の韓国における花見の様子から日本の花見の様子との差を見出し、戦前の両民族の間で花見の様子がどう異なったかを推定してみよう。竹国(1999)は、日本の花見の仕方を公園でグループごとに場所取りをして宴会をする「定着型」としたら、鎮海での花見は、街中をあちこちそぞろ歩く「逍遥型」であるとした[109]。「逍遥型」花見の様子は、鎮海だけではなく、韓国の一般的な花見の様子である。「桜が朝鮮にもなかったのではないが、殆どその美しさを認識せず、春がくると、自然に咲いて散るだけであり、人に愛賞されたことはなかった[110]」ということから、花見自体も桜に対する特別な思いから行われたのではないため、素通り花見が行われただろう。

(2) 行事としての花見の定着の環境的要素

1910年代半ばになると「近頃各地に於て、櫻樹の植栽が盛んに行はれるので、到るところに櫻の名所が出来、朝鮮の春も内地風の花見客に賑ふやうにな[111]」り、「京城の付近に住む人の年中行事の一つ[112]」となった。相当数の花見客が引き寄せられる所が全鮮で10余ヶ所に到り[113]、京城に花見が広く、速やかに伝播された。以下ではその背景に電車や府営バス等といった交通機関の発達があることを前提に、花見にはどのような植民地期文化要素が含まれているかについて考察する。

① 電車

電車は居留民の生活圏を中心に路線が敷かれる一方、昌慶苑行きの総督府医院線(1910)や奨忠壇公園行きの奨忠壇線(1926)が新設され、花見客への交通上の便宜をはかった。花見シーズンになると、電車は全力を挙げて126台を運行したものの15-16万人しか運び切れず、毎回満員電車が運行され、昌慶苑、奨忠壇を中心に人の波はどこまでも続いたという[114]。1928年4月22日は日曜日でもあり、昌慶苑を訪ねた花見客は5万人近くと推計され、電車や府営バス(後述)だけではなく、牛耳洞、月尾島などの京城近郊に向かう花見客まで合わせる10余万人に至り、京仁線(鉄道)もすし詰め状態であると伝えられた[115]。このような傾向は1930年代にも続き、花見の最中に「奨忠壇紫霞門の外、東大門の外も人込みで電車ごと寿司詰め状態[116]」という。

② 府営バス

1928 年 4 月末から営業を開始した府営バスの場合、規模も大きくなかったが[117]、多くの路線が電車と重複したうえ電車より運賃が高く、乗り心地や乗務員の態度の評判が悪くて、府民に背を向けられていた。しかし、花見シーズンになると、「平素はガラアキの府営バスでさえ[118]」、「昼夜問わず乗客が満員[119]」であるほど人波が押し寄せるほど、花見特需に沸いた。

③ 交通機関の植民近代都市遊覧としての機能

このように、花見シーズンになると、これらの交通機関は人で溢れた。1929 年 4 月 18 日から 21 日までに昌慶苑を訪れた人数は昼夜を合わせて約 11 万名[120]に至るほど多くの人が「花見」のために利用したのである。この交通機関の運行路線に沿ってみると、花見にいく移動経路だけではなく、近代植民都市遊覧といった機能がみられる。京電バス[121]の市内・東部・北部路線をみると、［表１］の通り、花見の名所行くバス路線は、植民地支配の象徴的建物や施設、近代的工業施設などに寄るからである。

	市内		東部	西部	南部	北部
路線↓	朝鮮神宮	昌慶苑＊	東大門	葬齊場	漢江橋	総督府
	科学館	総督府	京城グラウンド	碧蹄館	鷺梁津	昌慶苑＊
	博文寺	景福宮	奬忠壇＊		飛行場	経学院
	昌慶苑＊	徳壽宮	清涼里		永登浦駅	敦岩町
			林業試験場		鐘紡・東洋紡	彌阿里
			中浪橋		麥酒会社	牛耳洞＊
			往十里		九老里	舊把撥里
			纛島＊		梧柳洞	

表 1　京電バスの路線（＊表示は花見の名所）
（出所）佐脇 精(編)（1937）『京電ハイキングコース』京城電気株式会社、140 頁。

(3) 教科書における桜・花見

① 国花としての桜

朝鮮人が桜に対して特別な意味を込めなかったということは前述したが、支配者側は、桜や花見に対する親しみを「日本臣民ナル韓人[122]」に覚えさせようとした。その手段の一つが、学校教育である。ここでは『高等國語讀本』に表れた桜や花見について考察する。朝鮮総統府が発行した『(改修) 高等國語讀本·巻 5』(1922)の第 1 課「国花」によると、「我が國の國花は櫻なり。一言に花といへば卽ち櫻の事」とした。桜を国花と称したのは、法律的表現ではなく、「國によりて好も違へば愛する花も異なり…國民がわけて尊重するものを國花と名づくべし…一般の民が賞する故にいふもあり、王家の紋章なる故に

いふものあり」という定義に基づく表現であろう。続いて「菊も亦貴ば…皇室の御紋に用ひらるること、此の花の第一の値なるべし」と叙述されている。国民の愛する花＝国花の桜に対し、皇室の御紋として第一の価値のある菊を別格化にした。また、桜が花の代名詞化として使われたのは古典からもみられる[123]ように普通学校国語読本において、一頁全部を費やした桜並木の絵に「ハナ」と書いていることからみても[124]、花＝桜の認識を形成させたと思われる。

『(新編) 高等國語讀本·巻5』(1923)第3課「櫻」の章では、桜の比較対象として梅とバラが登場することが注目に値する。何故なら、中国の象徴といえる梅、西洋の象徴ともいえるバラに対しての桜の優位性が表れているからである。その優位性の存するところは「櫻は簇り咲いて賞すべく、一朶の白雲に集りて個性を沒却す。薔薇は權利を表し、之を要求すべき機關を有す…櫻は義務を表はし、運命を知りて之に服從す」となっている。ここにおいては、厳しい冬に忍耐する、困難を乗り越える生命力、秀麗な美人、春の知らせ、清らかで微かな香りがする人格体[125]などの肯定的なイメージを持ち、朝鮮の士大夫からも愛され、多くの詩が残された梅[126]や西洋で愛されているバラは、桜にその優位を譲ることになる。朝鮮においても桜の「国花」化が進められるとともに、従来朝鮮人において春の花としてよく知られていた梅＝中国との関連性を絶とうとする試みの観がある。

② 花見の「独自性」

『(新編) 高等國語讀本·巻7』(1923)の第4課「花見」でも、引き続き梅とバラを通じて中国や西洋を比較対照とする。「支那の桃李も専ら詩人に歡ばれ、西洋の薔薇や草花も、主として上流社會の弄びである」である一方、「花見といふ遊樂が年中行事の一つとなつて、老幼男女、貴賤貧富、打連れて花下に遊ぶといふ風俗は、西洋にも支那にも無い。全く日本獨得の事」であると日本の花見が持つ大衆性が中国や西洋にはない特徴とした。続いて業平卿や和歌から桜や花見の歴史を探り、「日本で櫻の國となつたのはつまり平安遷都以降の事である」ことや「寛平の御時の櫻花の宴といふ名稱が、『後選集』に初めて見える」ことなどその歴史性を表している。桓武天皇の平安遷都(794)の際の「左近の桜」(柴宸殿の南庭の左側の桜) から引き出そうとしたが、これは9世紀以降のことで、その以前までは「左近の梅」である[127]。歴史的事実はともあれ、このような「独自性」を主張することにより、桜と花見に対する親近性を朝鮮の人々に与えたということであろう。

おわりに

かつて朝鮮半島には朝鮮在来種を含む様々な桜＝山桜が生植していたが、朝鮮人は桜に興味を持っていなかった。それが一転したのが日朝修好条規の以降、朝鮮半島への日本人の移住が増加してからである。当初、日本居留民は朝鮮に桜の少なかったことから自分たちのノスタルジアを満たすため、居留地を中心に桜を植えた。しかし、京城の日本人居留

区と朝鮮人居住区という地域的二重構造のなかで、朝鮮人が境界線を跨いで日本が植えた桜に接することは少なかったとみられる。朝鮮人が桜に接し、花見が普及したのは、日清戦争以降、植民地政策として設けられた南山公園や昌慶苑など京城府内の各種公園に「公園施設」として桜が植樹されてからである。しかし、朝鮮に作られた公園は単に人々を楽しませる近代的空間というだけでなく、朝鮮の権威の破壊と改造を通じて、日本人が支配者として確実な位置を保ち、朝鮮統治の効率性を高める等の巧みな仕掛けも仕込まれていた。

倭城台公園が朝鮮の支配のゆかりの地であること、「日韓人共同の公園」と称された漢陽公園は、のち朝鮮神宮の境内となり、朝鮮側が建てた朝鮮式客舎は撤去された。朝鮮王室の離宮であった昌慶宮は宮殿の破壊や変造を余儀なくされ「昌慶苑」となり、大韓帝国のため戦った軍人の追悼空間であった奨忠壇は飲酒と歌舞する花見の名所となり、奨忠壇公園が見下ろせる場所には博文寺が建てられた。これらの公園に植えられた桜は「施設」として区分されていることから、当初から特定な「目的」があることが考えられる。花見の季節における交通機関による大量の花見客の輸送ができるなど、朝鮮人も次第に桜をめぐる環境的変化に影響され、花見は朝鮮において定着していったのである。更に教育を通じて桜や花見により朝鮮人を日本人としての自覚を持たせる試みもあった。そこでは梅＝中国や、バラ＝欧米と比較することによって、桜＝日本の美的の優秀性だけではなく、日本の花見が持つ平等性も唱えられた。それは見方によっては日本によって与えられた「近代化」ともいうべきものであり、また日本の朝鮮支配の深化と成功ともいうべきものであった。植民地朝鮮に於いて桜と花見が象徴するものは大きいと言わざるを得ない。

以上みたように植民地朝鮮において桜と花見は受容された。しかし、朝鮮人の桜に対する認識は日本人の桜に対する認識のようにはならなかったし、花見も桜の木の下で飲食を楽しむという日本式花見には完全にはならなかった。これはひとつの文化の他文化への影響、また受容問題として更に研究すべき問題であろう。その他に今後の課題としては、桜の名所とされた鎮海、馬山、東萊温泉、群山、扶余、平壌、鎮南浦など[128]、京城だけではなく他の地方を含めることで植民地朝鮮における桜・花見の全体像を捉えることである。また、台湾で桜や花見がどのように受け入れられたかを調べることである。台湾の冬は日本や朝鮮ほど寒くないため、ソメイヨシノの成育に必要な「低温刺激」がなく植樹してから数年後枯死する場合が多かったという[129]。こうした台湾における桜・花見をめぐるポストコロニアルを明らかにすることを通じて、本稿の持つ断片性、一面性という問題点を克服したい。明治政府によってイデオロギーの道具化された桜は、日中戦争からその美的価値が天皇＝国家への犠牲といった兵士の死にメタファーされ[130]、植民地朝鮮でも徴兵制の施行(1944)に伴いこうした桜の意味の拡張が試みられる[131]。このような韓国のハビトゥスに刻まれていた美的対象としての桜と植民地支配の残滓、軍国主義の象徴という記憶についても、「韓国式花見」に到る環境的要素と併せて今後明らかにしていきたいと考える。

(1) 新村出（編）（2018）『広辞苑』第7版、岩波書店。

(2) 徐泰貞（2016）「1910年代『昌慶苑』の運営とその性格」『韓国民族運動史研究』第89巻、韓国民族運動史学会。（韓国語）

(3) 金庭恩（2015）「日帝強占期昌慶苑のイメージと遊園地文化」『韓国造景学会誌』第43巻6号、韓国造景学会。（韓国語）

(4) 朴昭賢（2004）「帝国の趣味：李王家博物館と日本博物館政策について」『美術史論壇』第18号、韓国美術研究所。（韓国語）

(5) 金炫淑（2008）「昌慶苑の夜：花見と夜桜」『韓国近現代美術史』第19号、韓国近現代美術学会。（韓国語）

(6) 金海慶（2011）「桜からみた近代行楽文化の解釈」『韓国伝統造景学会誌』第29巻第4号、韓国伝統造景学会。（韓国語）

(7) 金庭恩（2014）「韓日賞春文化と近代：桜の象徴変化を中心に」『日本研究』第22巻、高麗大学校グローバル日本研究院。（韓国語）

(8) 姜榮祚（2016）「近代釜山における花見名所の立地的特徴と成立に関する研究」『韓国造景学会』第44巻第5号、韓国造景学会。（韓国語）

(9) 金東明（2018）「植民地朝鮮での桜の文化触変：牛耳洞の桜から昌慶苑の桜へ」『韓日関係研究』第62号、韓日関係史学会。（韓国語）

(10) 平野健一郎（2000）『国際文化論』東京大学出版会。

(11) 高木博志（2011）「桜」、板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔（編著）『東アジアの記憶の場』河出書房新社、263－287頁。

(12) 大貫恵美子（2003）『ねじ曲げられた桜：美意識と軍国主義』岩波書店。

(13) ソメイヨシノは幕末から明治初めの頃に作られた品種であり（中尾佐助（1986）『花と木の文化史』岩波書店、122頁。）、平安時代の古今和歌（『凌雲集』など）に詠まれた桜や鎌倉時代に武士が鑑賞した桜とは違っている。（平安時代から江戸時代までの桜については、以下を参照。有岡利幸（2007）『桜Ⅰ』法政大学出版局。）

(14) 竹国友康（1999）『ある日韓歴史の旅：鎮海の桜』朝日新聞社。

(15) 金東明（2019）「桜の文化触変：昌慶苑花見から汝矣島花見へ」『韓日関係史研究』韓日関係史学会。（韓国語）

(16) 崔南善（1947）『朝鮮常識：風俗編』東明社、211頁。（韓国語）

(17) 亀岡栄吉（1926）『四季の朝鮮』朝鮮拓殖資料調査会、13－14頁。

(18) 『毎日申報』1915年5月5日。

(19) 前掲、『四季の朝鮮』13－14頁。

(20) 『大阪朝日新聞付録朝鮮朝日・南鮮版』1929年4月9日。松田甲（1922）「櫻を牛耳洞に離職せし洪良浩」『朝鮮』第92号、85－93頁。前掲、「韓日賞春文化と近代：桜の象徴変化

を中心に」83 頁。崔仁栄（2019）「日本強占期京元線鉄道の倉洞駅：花見とハイキングの窓口」『都市研究：歴史･社会･文化』第 21 巻、都市史学会、46 頁。（韓国語）

(21) 京畿道（編）（1937）『京畿地方の名勝史蹟』朝鮮地方行政学会、144－145 頁。

(22) 『毎日申報』1915 年 5 月 5 日。

(23) 前掲、『ある日韓歴史の旅：鎮海の桜』254 頁。

(24) 『毎日申報』1915 年 5 月 5 日。

(25) 李鍾默（2006）『朝鮮の文化空間（第 4 巻：朝鮮後期）』ヒューマニスト、190－217 頁。（韓国語）

(26) 前掲、『四季の朝鮮』14 頁。

(27) 『朝鮮朝日南鮮版』1933 年 4 月 21 日。

(28) 前掲、『四季の朝鮮』14 頁。前掲、『京畿地方の名勝史蹟』144－145 頁。『朝鮮朝日南鮮版』1933 年 4 月 21 日。

(29) 『大阪朝日新聞付録朝鮮朝日･南鮮版』1929 年 4 月 9 日。

(30) 前掲、『京畿地方の名勝史蹟』144－145 頁。

(31) 『朝鮮朝日南鮮版』1933 年 4 月 21 日。

(32) 『朝鮮朝日南鮮版』1933 年 4 月 21 日。

(33) 『毎日申報』1917 年 4 月 29 日。

(34) 軍器の製造を担当した兵曹所属の官庁。

(35) 京城府（編）（1936）『京城府史』第 2 巻、568－569 頁。

(36) 『毎日申報』1915 年 5 月 5 日。

(37) 森為三（1922）『朝鮮植物名彙』朝鮮総督府学務局、207－212 頁。

(38) 朝鮮総督府内務局（編）（1929）『地方行政区域名称一覧』3 頁。

(39) 前掲、『京城府史』第 2 巻、568－569 頁。

(40) 同上。『朝鮮日報』1935 年 10 月 11 日。

(41) ヘザ･ヴァーテク（著）鄭鉉奎（訳）韓哲昊（監修）（2012）『朝鮮、1894 年の夏：オーストラリア人 ヘザ･ヴァーテクの旅行記』チェッカハムケ、198 頁。（韓国語）

(42) 前掲、『京城府史』第 2 巻、568－569 頁。

(43) 『朝鮮日報』1935 年 10 月 11 日。

(44) 前掲、『四季の朝鮮』朝鮮拓殖資料調査会、5－6 頁。

(45) 東京市公園課（編）（1926）『小金井の櫻』東京市、1 頁。

(46) 『京城新報』1909 年 4 月 25 日。

(47) 前掲、「韓日賞春文化と近代：桜の象徴変化を中心に」。直訳すると、「領域表示」である。

(48) 藤村徳一（編）（1927）『居留民之昔物語』第 1 編、朝鮮二昔会、18－19 頁。

(49) 橋谷弘（2004）『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、11－12 頁。二重構造については、ほか、孫禎睦（1996）『日帝強占期都市化賀過程研究』一志社（韓国語）を参照。一方、民

族別の居住地の区別が著しくなく、混合の様子を見せたという主張する研究は以下を参照。金鐘根（2010）「植民都市京城の二重都市論に対する批判的考察」『ソウル学研究』第38巻。（韓国語）

(50) 『朝鮮総督府官報』1914年4月14日。

(51) 吉田光男（2009）『近世ソウル都市社会研究：漢城の街と住民』草風館、161－164 頁。

(52) 田中彰（2003）『明治維新と西洋文明：岩倉使節団は何を見たか』岩波書店、148－151頁。東京都建設局（1963）『東京の公園：その90年のあゆみ』東京都、16頁。

(53) 前掲、『明治維新と西洋文明：岩倉使節団は何を見たか』152頁。

(54) 松山常次郎（1936）「合理的関係を確立せよ」朝鮮新聞社（編）『朝鮮統治の回顧と批判』、163頁。

(55) イザベラ･バード（著）、時岡敬子（訳）（1998）『朝鮮紀行：英国婦人の見た李朝末期』講談社、64頁。

(56) 中野等（2008）『文禄･慶長の役』吉川弘文館、106頁。

(57) 京城府（編）（1936）『京城府史』第1巻、278、324頁。前掲、『京城府史』第2巻、566－567頁。

(58) 前掲、『京城府史』第2巻、543頁。

(59) 同上、665頁。

(60) 同上、687－688頁。

(61) 前掲、『京城府史』第2巻、46頁。

(62) 同上、53頁。

(63) 京城居留民団（編）（1912）『京城発達史』京城居留民団、446頁。

(64) 小田部雄次「聖蹟と行幸：行幸･行哲の政治学」、山田朗（監修）･歴史科学協議会（編）（2008）『天皇･天皇制をよむ』東京大学出版会、212頁。

(65) 『毎日申報』1911年5月2日。

(66) 朝鮮総督府により、1914年3月31日に最終的に居留民団が解散、居留民団の事務が京城府に移管。

(67) 『毎日申報』1914年4月30日。

(68) 前掲、『居留民之昔物語』第1編、90頁。

(69) 同上、90－91頁。

(70) 前掲、『京城発達史』447－448頁。

(71) 前掲、『居留民之昔物語』第1編、91頁。

(72) 漢陽公園は後日、南山公園となり、京城神社の境内となる。

(73) 『大韓毎日申報』1910年5月31日。

(74) 前掲、『京城発達史』447－448頁。前掲、『居留民之昔物語』第1編、90－92頁。

(75) 申載敏（1915）「（讀者文壇）漢陽公園遠足會記」『龜岳宗報』第5号、侍天校宗報社、65－66頁。

(76) 朝鮮総督府（1927）『朝鮮神宮造營誌』2－4 頁。

(77) 前掲、『京城府史』第 2 巻、820 頁。「御宸筆」ではなく、「御染筆」と表記したことで李王家の位置付けがうかがえる。

(78) 京城府（編）（1927）『京城都市計画資料調査書』京城府、247－249 頁。

(79) 同上。

(80) 金海慶･崔賢妊（2013）「日本強占期奨忠壇公園変化に関する時系列的研究」『韓国伝統造景学会誌』第 31 巻第 4 号、韓国伝統造景学会。（韓国語）

(81) 王の要求、政治的状況、王室の需要に応じて建てられ宮であり、王が執務し、定住する法宮とは異なる。（出典：金圭淳（2019）「朝鮮宮闕の立地選定の基準と地形に関する研究：景福宮と昌徳宮を中心に」『文化財』第 52 巻 3 号、131 頁。（韓国語）

(82) 権藤四郎介（1926）『李王宮秘史』朝鮮新聞社、22 頁。

(83) 同上、23 頁。

(84) 孟子の「與民偕樂」からきているようで、「諧」は「偕」の誤記であると考えられる。

(85) 前掲、『李王宮秘史』24 頁。

(86) 同上、22 頁。

(87) 同上、7 頁。

(88) 同上、23 頁。

(89) 前掲、『天皇･天皇制をよむ』216－219 頁。

(90) 有岡利幸（2007）『桜Ⅱ』法政大学出版局、5 頁。

(91) 明治天皇上野公園行幸 60 年記念式典協賛會（1936）、『明治天皇上野公園行幸 60 年記念誌』1 頁。

(92) 李成市「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」宮島博史（ほか編）（2004）『植民地近代の視座：朝鮮と日本』岩波書店、27－48 頁。

(93) 三成建築設計事務所（調査･編纂）（1985）『昌慶宮：発掘調査報告書』文化財管理局、144 頁。（韓国語）

(94) 佐々木時雄（1987）『動物園の歴史：日本における動物園の成立』講談社、31－32 頁。

(95) 『韓国併合始末ノ件』(1910) アジア歴史資料センターレファレンスコード:A04010229300。

(96) 前掲、『日韓併合小史』236－237 頁。

(97) 海野福寿（1995）『韓国併合』岩波書店、223 頁。

(98) 森山茂徳（1989）『近代日韓関係史研究』東京大学出版会、215－220 頁。

(99) 小川原宏幸（2010）『伊藤博文の韓国併合構想と朝鮮社会：王権論の相克』岩波書店、422 頁。

(100) 洪順敏（1994）「ソウル宮闕の変遷」『歴史批評』第 24 巻、歴史問題研究所。洪順敏（2004）「日帝の植民地侵奪と景福宮の毀損」『文明研志』第 5 巻 1 号、韓国文明学会。呉昌泳（1993）『韓国動物園 80 年史：昌慶苑編』ソウル特別市。（韓国語）

(101) 『大阪朝日新聞付録朝鮮朝日･南鮮版』1931 年 4 月 29 日。

(102) 『大阪朝日新聞付録朝鮮朝日・南鮮版』1931年3月27日。

(103) 『朝鮮日報』1935年4月22日。

(104) 同上。

(105) 『大阪朝日新聞付録朝鮮朝日』1927年4月21日。

(106) 前掲、「昌慶苑の夜：花見と夜桜」。

(107) 小林善帆（2013）「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法：植民地台湾との相互参照を加えて」『日本研究』第47巻、国際日本文化研究センター。

(108) 『大阪朝日新聞付録朝鮮朝日・南鮮版』1931年3月27日。

(109) 前掲、『ある日韓歴史の旅：鎮海の桜』5頁。

(110) 『朝鮮日報』1934年6月24日。

(111) 『毎日申報』1915年5月5日。

(112) 同上。

(113) 同上。

(114) 『大阪朝日新聞付録・朝鮮朝日』1927年4月27日。

(115) 『大阪朝日新聞付録・朝鮮朝日』1928年4月24日。

(116) 『東亜日報』1933年4月17日。

(117) 1932年6月基準の京城府営バスは、在籍車両53台、1日平均乗客数1万7540人で、東京の在籍車両662台、1日平均乗客数11万2968人、大阪の在籍車両499台、1日平均乗客数12万3641人に比べると、規模が大きくない。（出典：南満州鉄道株式会社経済調査会（編）（1933）『朝鮮に於ける自動車運送事業に就て』南満州鉄道株式会社、234－235頁。東京都交通局『東京都交通局60年史』1972、771、780、794頁。大阪市交通局（1980）『大阪市交通局75年史』資料編、12－15頁。）

(118) 『大阪朝日新聞付録・朝鮮朝日南鮮版』1929年4月23日。

(119) 『大阪朝日新聞付録・朝鮮朝日南鮮版』1930年4月15日。

(120) 期間中昼夜別データを筆者より合計。各日の昼夜データは、『大阪朝日新聞付録・朝鮮朝日南鮮版』1929年4月23日に拠る。

(121) 府営バスの経営難により1933年に京城電気株式会社に買収され、従来電車と重複した路線から電車が敷設されていない地域を中心に改編する。（出典：森秀雄（編）（1935）『伸び行く京城電気』京城電気株式会社、96－102頁。）

(122) 『韓国併合ニ関シ各種ノ意見』(1910)、アジア歴史資料センターレファレンスコード：A03023678100。

(123) 『宇治拾遺物語』の説話集に登場する「花」は「桜」を意味する。（出典：三木紀人（他、校注）（1990）『宇治拾遺物語』岩波書店、22－23頁。）

(124) 『國語讀本』巻1（1934）朝鮮総督府、7頁。

(125) 裵ダニエル（2017）「中国古典詩に表れた梅花の描写の分析」『韓中言語文化研究』第46号、韓国中国言語文化研究会。（韓国語）

(126) 申翼澈 (2004)「18 世紀梅花詩の三つの様相」『韓国詩歌研究』第 15 号、韓国詩歌学会。（韓国語）

(127) 前掲、『ねじ曲げられた桜：美意識と軍国主義』105－108 頁。

(128) 『大阪朝日南鮮版』1935 年 4 月 3 日。

(129) 勝木俊雄（2015）『桜』岩波書店、198－206 頁。

(130) 大貫恵美子（2006）『学徒兵の精神誌：「与えられた死」と「生」の探求』岩波書店、41－44 頁。

(131) 内地の小学校音楽教科書に登場する「靖國神社」が植民地朝鮮にも用いられる。『初等音楽』第 4 学年（1943）、朝鮮総督府、42－43 頁。